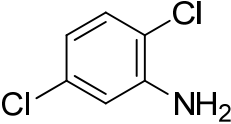


4	CAS 番号 : 95-82-9	物質名 : 2,5-ジクロロアニリン
化審法官報公示整理番号 : 3-261 (ジクロロアニリン) 化管法政令番号 : 1-156 (ジクロロアニリン) 分子式 : C ₆ H ₅ Cl ₂ N 構造式 :  分子量 : 162.02		

1. 物質に関する基本的事項

本物質の水溶解度は 2.5×10^3 mg/L (60℃) で、分配係数 (1-オクタノール/水) (log Kow) は 2.75、蒸気圧は 6.8 mmHg (=900 Pa) (116℃) である。生物分解性 (好氣的分解) は BOD 分解率で 0% であり、濃縮性がない又は低いと判断される物質である。また、環境中で加水分解性の基をもたない物質とされている。

ジクロロアニリンは、化学物質排出把握管理促進法第一種指定化学物質に指定されている。本物質の主な用途は、農薬・染料・顔料中間体とされている。ジクロロアニリンとしての平成 25 年度における製造・輸入数量は 1,000t 未満、化管法における製造・輸入量区分は、1t 以上 100 t 未満である。

2. 曝露評価

ジクロロアニリンの化管法に基づく平成 25 年度の環境中への総排出量は 0 t であった。このほか、移動量は廃棄物へ 0.52 t、下水道へ 0.021 t であり、届出排出量の排出源は化学工業のみであった。

Mackay-Type Level III Fugacity Model により媒体別分配割合の予測を行った結果、大気、水域、土壤に等量排出された場合、土壤に分配される割合が多かった。

水生生物に対する曝露を示す予測環境中濃度 (PEC) は、公共用水域の淡水域では 0.05 µg/L 未満程度、同海水域では 0.05 µg/L 未満程度となった。

3. 生態リスクの初期評価

急性毒性値は、藻類では緑藻類 *Pseudokirchneriella subcapitata* の生長阻害における 48 時間 EC₅₀ 5,940 µg/L、甲殻類ではオオミジンコ *Daphnia magna* の遊泳阻害における 48 時間 EC₅₀ 1,810 µg/L、魚類ではメダカ *Oryzias latipes* の 96 時間 LC₅₀ 2,210 µg/L、その他の生物ではテトラヒメナ属 *Tetrahymena pyriformis* の増殖阻害における 48 時間 IGC₅₀ 42,800 µg/L が信頼できる知見として得られたため、アセスメント係数 100 を適用し、急性毒性値に基づく予測無影響濃度 (PNEC) 18 µg/L が得られた。

慢性毒性値は、藻類では緑藻類 *P. subcapitata* の生長阻害における 72 時間 NOEC 1,890 µg/L、甲殻類ではオオミジンコ *D. magna* の繁殖阻害における 21 日間 NOEC 32 µg/L が信頼できる知見として得られたため、アセスメント係数 100 を適用し、慢性毒性値に基づく予測無影響濃度 (PNEC) 32 µg/L が得られた。

本物質の PNEC は、甲殻類の慢性毒性値から得られた 0.32 µg/L を採用した。

PEC/PNEC 比は淡水域、海水域ともに 0.15 未満となるため、生態リスクの判定はできない。本物質については、製造輸入数量や PRTR データの推移の把握に努め、公共用水域の存在状況調査を実施する必要性を検討することが望ましいと考えられる。

有害性評価 (PNEC の根拠)			アセスメント係数	予測無影響濃度 PNEC (µg/L)	曝露評価		PEC/PNEC 比	PEC/PNEC 比による判定	評価結果
生物種	急性・慢性の別	エンドポイント			水域	予測環境中濃度 PEC (µg/L)			
甲殻類 オオミジンコ	慢性	NOEC 繁殖阻害	100	0.32	淡水	<0.05	<0.15	×	▲
					海水	<0.05	<0.15		

4. 結論

	結論	判定
生態リスク	情報収集に努める必要があると考えられる。	▲

[リスクの判定] ○：現時点では作業は必要ない、▲：情報収集に努める必要がある、■：詳細な評価を行う候補、×：現時点ではリスクの判定はできない

(○)：情報収集等を行う必要性は低いと考えられる、(▲)：情報収集等の必要があると考えられる、(－)：評価の対象外、あるいは評価を実施しなかった場合を示す